第４章　「後方支援」の空間とユニオニズム
――遠野ボランティアセンターの事例から――

岩舘　豊

１　はじめに
１−１　問題意識の所在

災害過程においては、直接的な被災地の内部のみならず、その外部においても様々な一時的活動空間が生成し展開する。三陸沿岸津波被災地外部からの支援活動の拠点空間は、どのようにして形成されたのか。これが本章の問いである。こうした一時的活動空間へと焦点をあてる視角は、次のような問題意識によって支えられている。

（１）**市民活動／社会運動の動態**：災害をはじめとする危機的な状況においては、それ以前からの市民活動／社会運動のなかで形成・蓄積されたヒト・モノ・知識が再配置・転用される。そこに行為者が接続・連関する回路が形成されることで、社会運動／市民活動が組み替え・更新・再編成され、 臨時の活動空間が生産される。その動態を具体的な空間から考察すること。

（２）**災害過程における労働／生存運動**：これまで筆者は、東日本大震災以前、新自由主義的な国家―市民社会・労働世界の再編へと対抗する反貧困運動や生存運動の広がりのなかで、個人加盟型労働組合の機能が上記活動の担い手によって「再発見」されてきたことに、関心を寄せてきた（岩舘 2013）。東日本大震災という巨大な災害過程において、個人加盟型労働組合はどのように対応し機能したのか。

以上の大きな問題意識のもと、本章では、2011 年 4 月に岩手県遠野市において形成された「共生ユニオンいわて・遠野ボランティアセンター」（以下、本文中では遠野ユニオンボラセンと表記する）を事例として、この一時的活動空間の生成・展開過程を記述し考察する。

１−２　本章の課題と方法

2011 年 4 月 18 日、岩手県遠野市の地区公民館において、大船渡市など三陸沿岸部の津波被災地へ救援・支援に向かう災害ボランティアを支援する活動の拠点が開設された。この災害ボランティアを「後方支援」するため一時的空間は、岩手県内陸部の北上市に拠点を置く個人加盟型労働組合である共生ユニオンいわてが設立したものであり、「共生ユニオンいわて・遠野ボランティアセンター」と名づけられた。

2011 年 4 月 18 日から 10 月末および 2012 年 5 月 26 日から 8 月 11 日にかけて、東京や大阪、京都など都市部からの来訪者を中心に、延べ 740 余名のボランティアがこの空間を訪れ、食事・寝具・ボランティア作業用具の貸与・提供を受け、被災地へと向かっていった。本章の課題は、この遠野ユニオンボラセンの空間分析から、災害過程における支援活動の動態の一端を明らかにすることにある。

筆者は、岩手調査班の一員として、2011 年 11 月から大船渡市など三陸沿岸部、遠野市、北上市での現地調査を実施し、（１）遠野ユニオンボラセンのスタッフへのインタビュー、（２）遠野ユニオンボラセンでの参与観察、（３）共生ユニオンいわてにかんする資料調査とインタビュー調査に従事してきた。また、仙台や東京において、共生ユニオンいわての協力団体スタッフおよび遠野ユニオンボラセンを経由して被災地支援に向かった若年非正規労働者へのインタ

ビューを実施した。本章では、これらのフィールドデータにもとづいて、遠野ユニオンボラセンの生成・展開過程を記述し、若干の考察を加える[1]。

２　構造的背景および団体のプロフィール

２−１　北上市の構造的特徴

遠野ユニオンボラセンをみていく前に、共生ユニオンいわてが拠点をおく都市・北上の地政学的な特徴について、簡便に４点確認しておきたい。本章の焦点は、あくまで遠野ユニオンボラセンの空間にあり、その記述・説明に必要なかぎりでの確認にとどめる[2]。

（１）交通・輸送インフラの結節点：北上市は、岩手県内陸部に位置し、北上川の舟運の中継港や奥州街道の宿場だった歴史をもっている。今日では、南北に東北新幹線、JR 東北本線、東北縦貫自動車道、国道４号線が走り、東西には JR 北上線、東北横断自動車秋田線、国道 107 号線が通り、その「南北／東西の幹線が交差」する「東北の十字路」という交通・輸送インフラの結節点となっている。

（２）産業集積と工業発展：こうした「交通の要衝」としての利点を活用するかたちで、北上市は、1955 年頃より内陸型の工業団地の造成・整備を進め、製造業を中心とした産業集積を図ってきた。1966 年には、北上工業団地が分譲を開始し、1999 年までに９つの工業団地と１つの流通基地を有する発展をみせたのである。とくに 1987 年には、北上市を含む北上川流域の４市１町が、北上川流域テクノポリス地域として承認され、1997 年には北上産業業務団地、1999 年には「基盤技術支援センター」や「北上オフィスプラザ」などが整備され、先端産業を中心として企業の誘致が図られ、工業発展を遂げてきた。

（３）北上文化圏の発展：東西南北に行き交うヒト・モノの中継地点あり、工業発展による人口流入、さらに近隣における松尾鉱山や岩沢鉱山が栄えたことにより、1960 年代後半から、北上市内の商店街と飲食店が大きく拡大し、北上という都市は隣接する花巻と合わせて、独自な文化圏を形成していった。

（４）中心市街地の衰退：しかし 1990 年代以降、モータリゼーションの進展と郊外への大型店舗出店により、中心市街地の空洞化が進んでいく。さらに、上記にみた工業団地が郊外に立地したために、そこで働く労働者もその多くは郊外で生活圏を形成したため、人口増加に関わらず空洞化はさらに進んでいった。

図４−１　北上市における工業団地の布置および交通・輸送インフラ（出典：北上市工業団地 HP）

こうした岩手県内陸部のインフラ整備と産業集積を背景に、製造業などの企業における賃金未払いや不当解雇などが生じ、労働問題に取り組む活動が必要とされてきたのである。

---

[1] 本文中に使用している写真画像は、注記がないかぎり筆者の撮影によるものである。

[2] ここでの記述は、主に安藤・吉川・北島らの先行研究に依拠している（安藤・吉川・北島 2003）。

２−２　共生ユニオンいわての概要

共生ユニオンいわては、北上市内に事務所をかまえる個人加盟型の労働組合である。2012 年 2 月の調査開始時点で、組合員数は 20 余名であった。

前身である北上合同労働組合は、1985 年に北上市で設立された。当時の北上市内の青年会メンバーが働いていた珠算教室における賃金未払い問題を契機として、個人加盟の労働組合として設立された。その後、上記（２）でみた産業集積と工業発展を背景として、北上市を中心として盛岡、一関などの内陸部の製造業・中小企業で働く労働者の労働問題について、相談・交渉・争議等の活動を実施してきた。上部団体としては総評の全国一般に属し、1980 年代後半のナショナルセンター再編以降は、全国労働組合連絡協議会（全労協）に加盟し、地域的には東北全労協の構成メンバーである。

写真４−１　共生ユニオンいわての事務所

組合名称が「共生ユニオンいわて」となったのは 2000 年に入ってからである。2000 年代には、北上市におけるイラク反戦運動への参加し、さらに 2008 年のリーマン危機時には北上の工業団地・誘致企業において非正規労働者の「雇い止め」「派遣切り」に対し失業者の住宅確保や生活資金貸付制度などの対策を北上市へ要求するなど、組合員の労働条件をめぐる課題を広くこえて、社会の課題へと対応してきた。

また地域的課題として、上記（４）でみた北上市中心市街地の空洞化問題が生じていたが、この課題に対応すべく、共生ユニオンいわての中心メンバーが 2000 年代半ば以降「街づくり市民の会」を立ち上げ、飲食店街を中心に組織化を行ってきた。そして、会の意思を北上市政に反映させるため、「街づくり市民の会」を中心とする後援活動のもと、市議会議員を当選させている。

写真４−２ 事務所の表札

また、組合の中心メンバーである山下正彦氏が「岩手県詩人クラブ」の事務局を担当していることから、その事務所も同じ場所に置かれている。

こうして、個人加盟型労働組合、「街づくり」の市民活動、詩の文化サークルという３つの活動がここを事務所とする、市民活動／社会運動の拠点空間が形成されてきたのである。

３　遠野ユニオンボランティアセンターの生成と展開

３−１　地震発生から遠野ユニオンボラセン立ち上げまで

遠野ユニオンボラセンが立ち上げるまでのいくつかの局面に着目しながら見ていくことにする。2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、北上市の震度は５強を観測した（気象庁 2011）。地震による被害は、北上市の発表によれば、罹災証明発行状況（建物のみ）が発行済件数 2,045 件（内、住家被害内訳　全壊 58 件、大規模半壊 14 件、半壊 509 件、一部損壊 1464 件）、人的被害死亡４人、負傷 19 人だった（北上市 2012）。「道路や鉄道、水道、電気等のインフラへの大きな被害や居宅を始めとして数多くの建造物にも損害があり、混乱の中で数週間を送」（北上市 2013）る、という状況だった。

写真４−３　高橋祐介氏・山下正彦氏
（共生ユニオンいわて）

共生ユニオンいわてのメンバーは、JR 東日本が盛岡から北上までの運行を開始した3月17日に事務所へ集まり、第1回震災対策会議を開催し対応を協議する。翌18日には、北上市へ被災者のための避難先確保の要請を開始する。こうした対行政交渉を行いながら、メンバー同士では「自分たちに何ができるか」と議論を重ねていった。

「俺たちでボランティアができるか。何をやったらいいか。やれることをみんなで言い合って、という風な格好だったんです。ですがね、けっきょく、そう若くもないしね。うーん、ガレキ出しに行ったって、半人前しかやれねえかなあ（笑）、なんて話になりまして。それで、むしろ必要なのはね、ボランティアに来る人たちを支援した方がいいんじゃねえか、っていう話になったんですよ」

（山下正彦氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

3 月 27 日の第 2 回震災対策会議で、三陸沿岸部への利便性から、独自のボランティアセンターを遠野市に設置する方針を確認し、翌 3 月 28 日には、遠野市災害対策本部と同市社会福祉協議会を訪問し、ボランティアセンターの場所確保を要請する。

「遠野に拠点つくろうと。けっきょく、あそこは場所的に、拠点になりやすいところでして、古くから交流の拠点ですので、大槌から陸前高田まで幅広く行けるし。ちょうど、我々が行ったころは、自衛隊と警察がびっしり入っているという状況でした。」

（山下正彦氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

4 月 2 日には、仙台にて東北全労協の対策会議が開かれた。仙台周辺の津波被災地を直接目にしたメンバーは、沿岸部の津波被災地に対する支援の必要性を痛感する。この 4 月 2 日の会議では、東北全労協に加盟する岩手・宮城・福島県の各地域労組の代表が集まり、大災害への対応を協議した。そして、岩手・宮城・福島では被害も状況も異なることから、統一した方針は立てず、それぞれの状況に応じた活動を相互に支援し合うこととなった。「被災者」から、主体的に活動していく「支援労働者」へと変わる転換点が、4 月 2 日というタイミングだったと亀谷保夫氏は述べる。

写真４−４　大内忠雄氏・亀谷保夫氏
（宮城全労協・東北全労協）

「3 月の 15 日に、東北全労協の対策本部を立ち上げたんですね。それは、電気が通じたということで。・・・で、その日のうちから、全国に東北全労協として支援要請をして、なおかつ、各県の各組合が組合員の安否確認を全力で、ということで、3 月いっぱい安否確認をやってもらって。で、その経過をふまえて、4 月 2 日にみんな集まってもらって、それで、画一的にね、これで統一的にやれるっていう状況ではないんで、とにかく各地区それぞれで支援体制をつくって地区ごとに頑張ってください、と。お互いサポートできるところはサポートしながら、ということで。で、その時に、北上の方は、遠野の方を経由しながら支援体制をつくりたい、と。
・・・組合員、友人・知人の安否確認を終わって、それで被災はしてるんですけど、その安否確認が終わった時点で、被災労働者から支援労働者に変わるっていうのが、4 月 2 日の時ですよね。」

（亀谷保夫氏　2013 年 1 月 30 日聞き取り）

4 月 9 日に、全国の協力団体からのカンパ金が届き、センター開設・運営資金のメドが立ったところで、最終的な遠野ユニオンボランティアセンター開設の決断に至る。4 月 12 日、遠野市松崎町七区自治会に自治会館借用を申込、15 日には自治会長から同意の回答があり、17 日に物資を搬入する。そして、2011 年 4 月 18 日、災害ボランティアを支援するための拠点空間として、遠野ユニオンボラセンが開設された。

> 「まごころネットが正式に発足したのが、2011 年 3 月 26 日なんですね、たしか。それは新聞等で見てたんだけど。それとの連絡は後でもいいなと。独自のセンターを設営する場所を確保しようっていうことで、まず 3 月 28 日に遠野に行ったんですよね。けっきょく、運営するのに金が必要じゃないですか。そのお金の算段をどうするかっていうことで迷ったんだけど、全労協が 4 月 9 日に来た時に、カンパ金をある程度の金額を持ってきてくれたんですよ。それで、後はもうやって、カンパ募るっていうことで、始まったんで。だから、最終的にボランティアセンターを設置するって決めたのは 2011 年 4 月 9 日だね。」
>
> （高橋祐介氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

３−２　遠野ユニオンボラセンの運営とボランティアの受入

遠野ユニオンボラセンは、2011 年には 4 月 18 日から 10 月 31 日までの 197 日間にわたって開設された（第 1 次遠野ユニオンボラセン）。主に東京、京都、大阪などの都市部から来訪するボランティアに対し、3 食および寝具、ボランティア作業用具の一部を無償で提供する活動を継続した。

来訪者は、共生ユニオンいわても構成団体である「遠野まごころネット」を通じて、大船渡、大槌、釜石、陸前高田など被災地への支援活動に従事した。2011 年の受け入れボランティア延べ 650 名強（同時期の遠野まごころネット・ボランティア総数の約 1.5%）、センタースタッフ延べ 250 名強。2012 年は 5 月 25 日から、8 月 11 日まで開設（第 2 次遠野ユニオンボラセン）。90 名のボランティア、スタッフ延べ 60 名である。

図４−５　第１次遠野ユニオンボラセンの様子

写真４−６　ボランティアに提供された昼食のおにぎり

センターの運営は、山下・高橋の両名を中心にして、女性スタッフが 2〜3 名加わって行われた。この女性スタッフは組合員ではなく、「街づくり市民の会」の活動で知り合ったメンバーであり、組合組織の動員ではなく「伝手」で集められたものだった。また、併行して行われていた「宮沢賢治が愛した山に登る会」で形成されていた「仲間」も、センターの設立・運営へと協力していった。

> 「案外、気楽に始めましたね。ざっと、まあ、布団集めて、飯を食わせるぐらいのことからやれるんじゃないっていう。それなら何とか伝手で集めて、伝手で人も集めて、飯も作る。私自身も、何とか料理はやるし、彼（高橋）もやるし、っていうようなことでね。」

（山下正彦氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

「私は、20 年来付き合っている山の仲間が遠野にいるんで、震災前も、ほとんど月に 1 回は、遠野に行って泊まっていたから、地理もそれから遠野の人たちの心根っていうかな、わりとすんなり入っていけた。」

（高橋祐介氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

組合の活動を基盤としながら、狭義の労働組合以外の活動によって形成されたネットワークによる人的・物的資源が、遠野ユニオンボラセンの設立・運営に大きく寄与したことが指摘できるだろう。ここには、中心市街地の空洞化に対する対応や、北上・花巻の文化圏に形成されてきた文化サークルのつながりなど、多層的な活動のなかで形成されてきたヒト・モノの連関が、遠野ユニオンボラセンという空間へと結びつけられていったのである。

３−３　都市部からのボランティア派遣

次にボランティアを派遣した側の動きをみていこう。遠野ユニオンボラセン開設と災害ボランティア受け入れの連絡は、全労協のネットワークを通じて全国の労働組合へともたらされた。東京からの主なボランティア派遣元となったのは、新橋に拠点を置く全国一般労働組合東京南部だった。本調査では、この全国一般労働組合東京南部からのボランティア派遣について、インタビュー調査を行った。

前述の 3 月 15 日における東北全労協の対策本部立ち上げ以降、被災地とそこでの組合の状況について、東京で活動する労働組合にも直接に現地の労働組合から少しずつ「現実的な情報」が届き始めていた。その「生活の情報」によって、全国一般労働組合東京南部でも少しずつ「労働組合としての支援」、震災への対応を取り始めていく。震災対応にあたった書記長の中島由美子氏は、次のように語っている。

「地震が起きた時は、東北にいる私たちの安否確認ですよね。全国一般は、東北地方に組合員がいますから、仙台を中心にした宮城の人たち、その人たちの安否も心配だったし、いろんな面で、その後、時間を追えば追うほどに被害の全容が見えてきて、これは何かしなくていけない、居ても立ってもいられなくなった・・・。
・・・地方の組合との連携があって、その意味で現実的な情報が入ってくるようになった。マスメディアで入ってくるような情報ではなく、生活の情報が入ってくるようになった。そこは労働組合が出ていかなくていけないと。とくに被災後の職場がなくなったとか、失業の問題、それと解雇されたり、いろんな問題が徐々に出てくるんですよね。そういう時に労働組合としての支援ですよね。同じ組合としての支援していく、そういう流れだったんです」

（中島由美子氏　2012 年 4 月 5 日聞き取り）

全労協のメンバーが被災地に入るのも、上記と同じく 4 月 2 日だった。そして、執行部を中心にして、物資カンパや義援金をもって組合員が被災地へと送り出していくなかで、現地の「光景」や「被災者の状況」が語られるようになる。その話を聞くなかで、組合員の間で、「主体的に動くこと」の模索が始まっていた。そして、「ちょうどその時に」、共生ユニオンいわてから遠野ユニオンボラセン開設の連絡が入ってきた。

写真４−７　中島由美子氏（全国一般労働組合東京南部）2012/4/5 撮影

「（被災地に）行って来た人たちが、ショッキングな光景という

ことで語って、被災者の人たちがどういう状況におかれているかということを話してくれるので、組合員の間でボランティアに行って、何か手伝うことができないか、主体的に動くことはないか、という声もあがってきたので。ちょうどその時に、共生ユニオンいわてが、ボランティアのためのボランティアをするということで、情報を受けて、私たちもそこに組合員を送りだそうと。」

（中島由美子氏　2012 年 4 月 5 日聞き取り）

写真４－８　M 氏・O 氏・W 氏（全国一般東京労働組合南部ジェネッツ分会）2012/4/20 撮影

遠野ユニオンボラセンの情報が入ってきたのは 4 月 16 日、Fax を通じてだった。この情報が、中島氏を経由して、組合全体に流れていった。東京の水道検針員の労働組合であるジェネッツ分会も、分会長を介してその情報を受け取ったメンバーだった。組合員である M 氏は、テレビやインターネットを通じて被災地の状況などを見聞きしていたが、「何ができるかと悶々としていた」ところだった。そこに、宿泊先もあって受け入れてくれる場所があることを知って、ボランティアに行くことを決める。

「ただそういう機会があったから行った。あまり組合がっていう感じがなかった。宿泊先があるし、条件がよかった。」

（O 氏　2012 年 4 月 20 日聞き取り）

「ほんとのボランティアですよね。自費で行く。何かあるからとか、報酬があるからとかじゃなくて、やっぱり行きたいからっていう。ほんとの意味でのボランティア」

（W 氏　2012 年 4 月 20 日聞き取り）

「いいタイミングじゃんって思って。気になってのは気になってたんで。いい機会だなって迷っていたら、彼（O 氏）が行くっていうんで、じゃあ行ってみようかなって。で、行った先が共生ユニオンの宿舎だったんですよね」

（M 氏　2012 年 4 月 20 日聞き取り）

ここでの「あまり組合がっていう感じがなかった」という語りからは、中島氏の言う「労働組合としての支援」というところからズレが生じることがうかがえるだろう。たしかに、ボランティア派遣を支えたのは、全労協を介したネットワークであった。しかし、行為者の意味づけとしては、「ただそういう機会があったから」であり、「やっぱり行きたいから」「ほんとの意味でのボランティア」という語りがあるように、組合員という行為主体とは離れたところで動機が語られている。そして、行った先が「たまたま」「共生ユニオンの宿舎だった」である。

東京都内の水道検針業務を都・水道局から委託されている企業で働く彼らは、「歩合」で仕事をしボランティア休暇もない。しかし、仕事をこなしていけば月末には連休を取ることが可能だったためボランティアに行くことができたという。そして「現職」である彼らにとっては、受け入れ先となる宿舎があることによって、仕事を続けながらボランティアに行くことが可能となった。

彼らの語りからは、遠野ユニオンボラセンという場所が、非正規雇用で働く若者たちが被災地支援のボランティア活動に参加する回路として機能したことがうかがえるだろう。そして実際に 2011 年 5 月末を皮切りに、何度も遠野ユニオンボラセンを経由して三陸沿岸の津波被災地へと足を運んでいく。では、彼らがたどり着いた遠野ユニオンボラセンとは、どのような空間だったのか。

４　遠野ユニオンボラセンの時間と空間

４−１　拠点空間の構成と一日の流れ

遠野ユニオンボラセンは、遠野まごころネットが最初に拠点をかまえた遠野総合福祉センターから徒歩１分にある松崎町第７区地区会館に開設された。自治会は平屋立ての建物で、玄関を入ると、左手に台所と食堂スペースとなっている。右手の広い和室がボランティアの休憩場所となっていて、カーテンで男女別に区切られていた。北側にトイレと倉庫があり、お風呂はないので作業を終えたボランティアは近くの銭湯やコインシャワー、車で行ける温泉などで入浴を行う。（以下、写真４－９から４－１２は 2012/7/2 撮影）

写真４−９　遠野ユニオンボラセンの外観

写真４−１０　遠野ユニオンボラセンの表札

写真４−１１　ボランティアの休憩場所

写真４−１２　遠野駅近くの銭湯「亀の湯」

遠野ユニオンボラセンの
基本的な一日の流れ

5:00 センタースタッフ起床　朝食準備
6:00 ボランティア起床
7:00〜 ボランティア、遠野まごころネットへ
昼：自治会館の掃除、洗濯、布団干し、食料の調達
17:00〜 ボランティア帰宿、入浴
18:00 夕食、のち「宴会」
22:00 消灯・就寝

朝５時、センターのスタッフが起床し、朝食とボランティアにもたせる昼食の準備を開始する。朝６時、ボランティアが起床し、スタッフと一緒に朝食を食べる。７時すぎにボランティアが作業に向かうと、スタッフは掃除と洗濯し、布団を干して、食材の調達に行く。夕方から夕食の支度をはじめる。ボランティアは、帰ってくると、銭湯などで汗と汚れを落とし、各自夜の飲みものを買って、センターに戻ってくる。

「朝６時に（起床の音が）鳴ります、ボーン！と。すぐ近くのまごころネットの拠点から歩いて１分のところなんですよ。すごいいいところに構えているんです、自治会館が。まごころネットから馬鹿でかい音で起床の音が直撃してくるから（笑）。うちはうちで６時に鳴らすんですよ。ボ

ーンボーンって。時計があって。ただ、まごころネットの放送の音がすごい。それでパッと起きて、布団を片付け、そしたらすでに朝食が、5 時くらいに起きて、受け入れのユニオンのスタッフさん達が準備してくれていて。おにぎりを握るくらいは手伝うけど、それで食って。けっこう時間なくて、食べて。・・・7 時半だったかな、集まらなきゃいけないんですよ、まごころネットの体育館の前に。ラジオ体操がたしか 7 時 20 分だったかな。第 1 と第 2。・・・で、7 時半に朝礼が始まります。・・・で、まあ 8 時からバスに乗って出発。」

（ジェネッツ分会 M 氏　2012 年 4 月 20 日聞き取り）

被災地での作業を終えたボランティアは、遠野まごころネットを解散した後、遠野ユニオンボラセンへ帰ってくる。多くのボランティアが「体育館のようなところで雑魚寝」しているなか、温かい食事と布団がある遠野ユニオンボラセンは「段違いに条件が良かった」。

そして、ボランティアの語りからは、夕食を兼ねた「宴会」が何より「魅力」だったという。

「ユニオンボランティアセンターは 18 時くらいから夕飯込みの＜宴会＞になる。それまでに風呂を済ます。夜 10 時くらいまで飲みながら話をする。ご飯がむちゃくちゃうまかった。・・・近所の農家の人たちが、とれたての野菜や山菜など旬のものの食材の差し入れがあって、それを料理してくれる。・・・いろんな特技をもっている人、即興で似顔絵を書けるおっちゃんとかいて、おもしろかった。大阪の学校の組合など、大阪の状況など冗談交えながら話をした。それが魅力で何度も行った。小さい空間だけど、居心地が良かった」

（ジェネッツ分会 M 氏　2012 年 4 月 20 日聞き取り）

「小さい空間だけど、居心地がよかった」という「宴会」の場では、何が行われていたのか。次に、参与観察にもとづいて「宴会」の場面をみていくことにする。

４−２　境界としての遠野ユニオンボラセン

以下に記すのは、「宴会」中にボランティアの M 氏が、支援活動中に熊に遭遇したことを話す場面である。

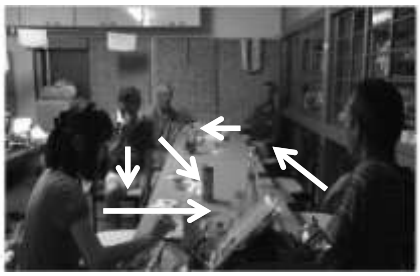


写真４−１３　食堂での「宴会」の場面
身体とまなざしとが、多方向かつ相互に交錯する　2012/7/28 撮影

高橋「M さんはこんなちっこい熊見たんだって」
・・・
M 氏「猫みたいにピョンって」
他のボランティア「え～」
高橋「で、そのすぐそばに母親がいてさ」
M 氏「あ～、いた可能性あるね」
高橋「いや、いたよ。絶対いた（笑）」

2012 年 4 月 28 日動画記録

ここでは、まず（1）ボランティアによる「被災地体験」の言語化が行われ、（2）他のボランティアによる体験の共有、（3）スタッフによる解釈枠組の提示、（4）ボランティアによる再解釈、というかたちで出来事が進行していく。ボランティアにとっても心理的負担の大きい「被災地」での体験が、「宴会」での相互行為によって言語され、解釈枠組みが構築されていく。その過程にはユニオンボラセンのスタッフが大きく介在するが、それは一方的な関係ではない。スタッフ−ボランティア間関係、スタッフ間関係、ボランティア間関係が同時に進行し、相互のまなざしが交錯しながら、この場が存立している。

遠野ユニオンボラセンという空間は、「活動地域（被災地）」と、北上や東京といった行為者

たちにとっての「日常生活圏」との境界にある一時的な空間である。その意味で、行為者はこの場を「通過」していく。ボランティアはもちろん、スタッフにとってもまた、この場所は日常の定住圏ではない。その意味で日常の役割や慣習から相対的に離れたところで、相互の社会関係が成立している。したがって、そこで、絶対的な解釈枠組みを提示する行為者は不在であり、その意味で、相対的に多様な解釈枠組みがその都度構築され、被災地の体験が各自によって（比較的）自由に経験化されていく余地が大きい。そうした相互行為を生み出す物的基盤として、遠野ユニオンボラセンという一時的活動空間は存立し機能していたのである。

4−3　「自己完結ボランティア」をめぐって

先にみたように、遠野ユニオンボラセンは、その場の集う行為者相互がそれぞれの「被災地体験」の解釈枠組みを提示・構築しうる場であった。その点が、食事や寝る場所の提供とならんで「ボランティアのためのボランティア」、「災害ボランティアの後方支援」として重要の意味を持っていたのである。

だが、同時にその場はまた、この空間を運営する行為者の「思想」によっても支えられていた。まず、彼らの言葉を聞いてみよう。

> 「けっきょくね、自己完結っていうのは、かっこいいんだけど、部隊で活動する場合に、自己完結できるのは軍隊だけなんですよね。遠野に第 2 師団の後方支援連隊っていうのが居て、飯つくって、トイレカーも行って。それが自己完結。で、個人で行って自己完結しろって言ったら、それこそトイレの問題どうするんだっていうのはあるわけですよね。自己完結なんかできないんだ。自己完結しろって言うから、2 日で帰っちゃう。体育館とかそういうところにゴロ寝のところに居たら、身体がもたないじゃないですか。」
>
> （高橋祐介氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

> 「食いもの全部持っていってね、遠野まごころネットもなかったとしたらね、直接被災地に乗り込んでね、自己完結で何がどれだけできるっていったら、やっぱりできないですね。」
>
> （山下正彦氏　2012 年 2 月 29 日聞き取り）

こうした言葉の背景にあるのは、震災支援活動における「ボランティアは自己完結が原則」論の広がりである。「ボランティアの標準化問題」を論じた関は、阪神・淡路大震災以降、ボランティアを「効率的に」「活用」する動きが広がり、その過程でボランティアの一般化と標準化が進行してきたと論じている（関 2013）。筆者なりに言い換えると、それはボランティアを計算可能なものにしていく回路あるいは装置としての災害ボランティアセンターが整備されてきたのである。一方でそれは、関もまた評価するように、災害時や被災地におけるボランティア活動を効果的に配置していくことに寄与した面がある。だが他方で、ボランティア役割の固定化を生み出した面もまた否定できない。

東日本大震災における、「ボランティアは自己完結が原則」言説の浸透・拡大は、こうした文脈において、結果的にボランティアという行為を自己完結できる行為主体のみに限定させる効果を持ち（そのこと自体がある種の幻想でありイデオロギーである）、完結しない／できない行為主体を「ボランティア」という行為あるいはボランティア活動から排除していく作用をもった。

しかし、「機能分化による専門化に支えられる標準化の動きから逸脱することで、システムを補完し、既存のシステムでは不可視化される／取り扱えない問題や活動領域そのものを創発する」のが「ボランティア活動」なのだとすれば（関 2013）、「ボランティアは自己完結が原則」言説がもつボランティア役割の固定化の論理は、その意味で、ボランティアの否定にもつながりかねない。こうした論理を否定していく行為が、災害ボランティアに対する支援ボランティア活動であり、「ボランティアは自己完結なんかできない」という思想によって支えられていた。

この思想に、個人加盟型労組のもつ「相互扶助」機能の再配置・転用を読み込むことはそう

大きく飛躍があるとは思われない。地域・合同労組とは、そもそも単独の資源では問題解決できない個人――その意味で「自己完結」できない個人が、寄り集まって職場における問題・困難の解決に取り組むために結合する集団である。ここでの「相互扶助」機能を再配置・転用し災害ボランティアへのボランティア活動によって、自己完結型ボランティアへと標準化する動きから逸脱し、自己完結した個人を前提とするシステム化のなかで排除されがちな人びとによる一時的活動空間を非意図的に創発した。遠野ユニオンボラセンの特性はここにあるだろう。

５　遠野ユニオンボラセンが示唆するもの―まとめにかえて

最後に、今後の課題を整地しておく意味で、2 点記しておこう。

（1）**一時的活動空間の動態**：本章では、災害過程における一時的活動空間という問題意識から、遠野ユニオンボラセンの事例に着目し、災害ボランティアの「後方支援」する拠点空間の生成・展開を記述した。本章での記述からは、災害過程において、共生ユニオンいわてや「街づくり市民の会」、「賢治が愛した山に登る会」など、それまでの市民活動／社会運動のなかで形成・蓄積されてきたモノ・ヒト・知識の連関が、再配置・転用されるかたちで、災害ボランティアの「後方支援」空間が形成された過程が浮かびあがった。その動態には、また、三陸沿岸、遠野、北上、仙台、東京という複数の場所と行為者とが連接し、ネットワーク化していく過程が生じていた。それによって、自己完結型ボランティアの枠組みから排除されがちな行為者が活動しうる空間が生成していったと言えるだろう。

だが、こうした支援活動そのものは地域の空間構成やインフラストラクチュアの配置・編成によって大きく構造的に規定されている点を忘れてはならないだろう。遠野ユニオンボラセンの設立に必要な物資や人の移動もまた、内陸を中心に再編成されてきた交通・物流インフラに支えられてきた。ここでの構造的規定性がいかなるものなのかについては、さらなる調査・研究が必要である。と同時に、都市・地域の構造を支えているさまざまなフローが遮断されたときに、生じてくる別のフローの効果として一時的活動空間はある。その動態こそが本章の眼目であった。この動態を理論化していくことも課題となる。

（2）**災害後のユニオニズム**：遠野ユニオンボラセンという「後方支援」の空間では、一時的に行為者が共在することで、支援活動体験が相互に意味づけられ、相対的に自由に経験化される余地が生じていた。そこでの「経験」は、行為者が属する労働組合と自らの労働組合実践へ埋め戻されていく。 新自由主義の展開と経済危機、そして大災害を経るなかで、遠野ユニオンボラセンという小さな空間のなかで生成された文化の萌芽を見逃してならないだろう。その意味で、2000 年代初頭に非正規労働者の組合に入り、東日本大震災後に「ためらったあとで」何度も遠野ユニオンボラセンへ足を運んだ M 氏による語りには注目してみたい。

> 「知り合いが一人もいなかった。被災した人が。なんかすごいこと起きてて。僕の家が公園の隣なんですけど、ベランダからみると、よくホームレス、野宿者の人が寝たりしてる。そういうのって被災しなくてもあるじゃないですか。東京にだって、災害にあったわけではないが路上で生活している人たちがいる。僕らだって何の保障もない生活ですから。」
> 「支援に行ったことで、自分の心の位置が定まったという意味で、すっきりした。けっきょく、身近に困っている人がいた時にやることと、本質的には同じだと思った。・・・被災地に限らず、困っている人っていくらでもいる。身近でもひどいことってたくさんある。・・・自分のタイミングでたまたま、お互いさまで、いろんな周期のなかでお互いさまの気持ちになっている時にやるものとして、ボランティアも労働組合も、人が物を落とした時に拾うとかと変わらないなって。」
> （M 氏　2012 年 4 月 20 日聞き取り）

この語りからは、「被災地」と「東京での路上生活」とが、「何の保障もない生活」という点から連結してとらえていく認識がうかがえる。自分たちの生活や身近での「ひどいこと」「困っていること」と被災地での状況とがつらなりのあるものとしてとらえられている。それはニューオーリンズでの災害経験から生じた「暮らし」を軸としたオーガナイジングの試みとも通底していくものと思われる（Rathki 2011）。そして、その意味において、「ボランティア」と「労働組合」とが「自分のタイミングでたまたま、お互いさまで、いろんな周期のなかでお互いさまの気持ちになっている時にやるもの」として、「本質的に変わらない」という認識がある。ここに胚胎しているのは、いまだ小さく生成途上であるが、経済危機と災害を経て生成する現代のユニオニズムの種子と言えるだろう。その生成に学知がどう関わるのか。そのこともまた問われているだろう。

謝辞

本調査・研究の実施にあたっては、遠野ユニオンボラセンのスタッフ、共生ユニオンいわて、全国一般労働組合東京南部、全国一般労働組合東京南部ジェネッツ分会、東北全労協、宮城全労協の皆様から、多大な厚意とご協力をいただきました。ありがとうございました。

文献・資料

安藤正知・吉川光洋・北島滋, 2003, 「第Ⅲ部　工業集積都市北上市における街づくりと市民参加」, 北島滋編著『グローバリゼーション下の非成長型都市の変動と街づくり』平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2）研究成果報告書, 研究代表者: 北島滋.

岩舘豊, 2013, 「ユニオン・アクティヴィズムの居場所」, 町村敬志編『都市空間に潜む排除と反抗の力』, 明石書店.

気象庁, 2011, 「【災害時地震・津波速報】平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」, http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji_201101/saigaiji_201101.html

北上市, 2013, 『北上市東日本大震災復興支援計画』, http://www.city.kitakami.iwate.jp/sub04/sougou/plan01/page_8390.html

北上市, 2012,「東日本大震災による市内の情報」, http://www.city.kitakami.iwate.jp/k/v/mboshirase/page_5967.html

北上市, 「北上工業団地」http://www.kitakami.ne.jp/~mono/danchi/access.html

共生ユニオンいわて, 2012, 「支援活動の検証への試み」, 共生ユニオンいわてホームページ, http://happytown.orahoo.com/unioniwate/　最終閲覧日 2013 年 6 月 12 日

共生ユニオンいわて, 2011-12, 『遠野ボランティア日記 No.1&No.2』, 資料作成: 岩舘豊

Rathke, Wade, 2011, *The Battle for the Ninth Ward: ACORN, Rebuilding New Orleans, and the Lessons of Disaster*, Social Policy Press.＝「第 9 地区の戦い――ACORN、ニューオーリンズの復興、および災害から学んだこと」海外労働情報研究会抄訳, 海外労働情報研究会「暮らしを軸にした労働の再編――ニューオリンズ洪水と東日本大震災の経験から」配布資料.

労働政策研究・研修機構, 2013, 「コミュニティオーガナイジングモデルの展開と災害復興――JILPT 海外労働情報研究会　ウェイド・ラスキ　コミュニティボイス代表の講演から」, 『Business Labor Trend』2013 年 1 月号, pp. 34-39,

関嘉寛, 2013, 「東日本大震災における市民の力と復興――阪神淡路大震災／新潟中越地震後との比較」, 田中重好・船橋晴俊・玉村正之編著『東日本大震災と社会学――大災害を生み出した社会』ミネルヴァ書房.

高橋祐介, 2012, 「遠野で担った後方ボランティア」, 『労働情報』830-831 号.

全国一般労働組合東京南部, 2011, 『ボランティア報告　東北被災地見たまま、感じたまま』, 発行責任者: 中島由美子.

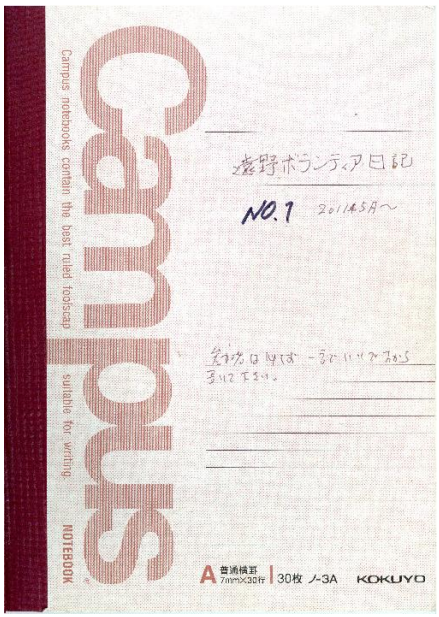
資料紹介１　『遠野ボランティア日記』

岩舘　豊

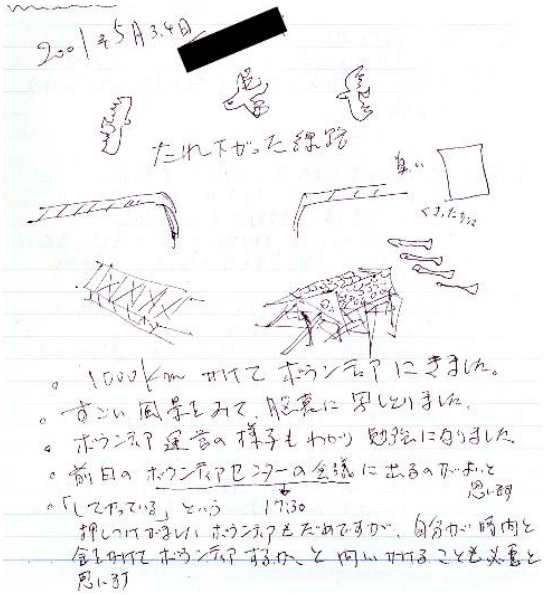
『遠野ボランティア日記』には、ユニオンボランティアセンターを訪れた人びとが、三陸沿岸部の津波被災地や遠野において、身をもって見聞きし感受したことがらの断片が言葉や絵によって記されている。岩手県内をはじめ、東京など関東圏や大阪・京都といった関西圏、さらには海外からやってきた人びとの言葉が２冊の大学ノートに残された。頁をめくると、災害直後からの被災地域の様子､腐ったサンマのにおい､ボランティア活動の具体的な内容について、葛藤や悲しみ、活動における出会いや喜びなど、整理されないままの言葉の数々が次々に立ち現れてくる。

遠野ユニオンボランティアセンターを経由して被災地へ支援に向かった人びとが被災地で何をし、そこでみた「風景」とはどのようなものだったのか。遠野ユニオンボランティアセンターという一時的空間のなかでは、どのような出来事が起こっていたのか。これらの問いを明らかにしていくための、一つの手がかりとなるのが『遠野ボランティア日記』である。

この『遠野ボランティア日記 No. １ &No ２』は、共生ユニオンいわての協力のもと、「社会と基盤」研究会によって PDF データ化・保存されている。



『遠野ボランティア日記 No. １』の表紙



日記の一部　2011 年 5 月 3・4 日付

資料紹介２　インタビュー映像

「災害ボランティアの後方支援――共生ユニオンいわての試み」

岩舘　豊

１　インタビュー映像の基本情報

インタビュー日時	2012 年 2 月 29 日
場所	岩手県北上市内　共生ユニオンいわて事務所
話し手	高橋祐介（共生ユニオンいわて書記長） 山下正彦（共生ユニオンいわて副執行委員長）
聞き手&撮影	山本唯人
編集	岩舘豊
収録時間	22 分 50 秒

＊このインタビュー映像は、「社会と基盤」研究会 HP 上にて公開を予定している。詳しくは、以下の URL を参照されたい。http://sgis.soc.hit-u.ac.jp/iwate201403

２　映像について

2012 年 2 月 29 日、遠野ユニオンボランティアセンターの開設・運営を中心的に担った高橋祐介氏と山下正彦氏に対して実施されたインタビューは、2 時間近くにおよんだ。この映像は、そのインタビュー映像記録に編集を加え、23 分弱へと内容を凝縮したものである。災害ボランティアに対する後方支援活動とその基盤となる空間は、どのように形成されていったのか。三陸沿岸部へ向かう災害支援ボランティアを支える拠点空間は、いかなる行為と思想によって支えられていたのか。このインタビュー映像は、こうした問いを軸にして編集されている。

災害ボランティアの後方支援という「試み」は、どのような社会空間を切り開こうとしたものなのか。その場所と経験から何を学び、どう引き継ぐべきなのか。映像にこめられた、担い手の声や表情や仕草、そして風景から、調査者の意図を超えた何かを感受していただければ幸いである。

インタビュー映像の一場面

インタビュー映像の構成

・地震直後の状況
・3/17 第 1 回震災対策会議
・遠野ボランティアセンター設立へ
・遠野市内の自治会館にセンター開設
・ボランティアの受け入れ
・被災地での活動
・ボランティアセンターの運営
・「ボランティアは自己完結であるべき」という議論をめぐって
・ユニオンボラセンという試み